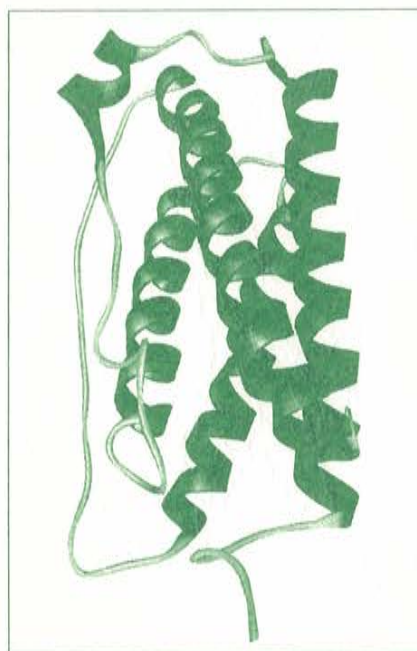


# 財団年報

平成 15 年度

*Annual Report 2003*



(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団  
Kato Memorial Bioscience Foundation

# 財団年報

平成 15 年度

*Annual Report 2003*

(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

Kato Memorial Bioscience Foundation

# 目 次

はじめに .....	1
I. 平成15年度事業報告	
1. 年間の経緯 .....	2
2. 助成事業	
(1) 第15回研究助成 .....	3
(2) 第15回国際交流助成 .....	3
(3) 第14回学会等開催助成 .....	9
3. 研究助成贈呈式 .....	11
4. 第20回加藤記念公開シンポジウム	
(1) 開催に当たって .....	17
(2) 講演プログラム .....	22
5. スナップ写真 .....	23
6. 平成15年度収支決算報告 .....	27
II. 平成16年度事業計画	
1. 助成事業 研究助成、国際交流助成、学会等開催助成 .....	28
2. 普及・啓発事業 第21回加藤記念公開シンポジウム .....	28
3. 平成16年度事業予算 .....	30
III. 研究助成者からの報告	
1. 研究助成 .....	31
(1) 第12回研究報告 .....	31
(2) 第13回研究報告 .....	54
2. 国際交流助成 .....	79
IV. 財団の運営と組織	
概 要 .....	122
平成16年度財団役員、評議員および選考委員 .....	125
編集後記 .....	127

# は じ め に

理事長 平 田 正

平成15年度の活動を以って本財団の活動も15年という区切りを迎えることが出来ました。これも偏に歴代の理事長、理事・監事・評議員および選考委員、さらには全国の研究者皆様からのご支援とご理解の賜と篤く御礼申し上げます。

翻ってみますと、協和発酵工業(株)の創始者でありました故加藤辨三郎博士のバイオサイエンスに懸けた熱い思いを「若手研究者の助成」事業を通して少しでも実現出来るようにと、昭和63年に本財団が設立され、平成元年から研究助成活動が開始されました。爾来15年、バイオサイエンスを取り巻く環境の激変のなか、その設立の趣旨に沿って活動を続けてまいりました。

本財団の設立時の基本財産は2億円、事業費は2百万円でしたが、次年度平成元年からは基本財産5億円、事業費4千6百万円にて本格的な活動が開始され、現在では基本財産7億6百万円、事業費6千9百万円の規模に達しております。

この15年間の助成事業をまとめてみますと、第一の柱である研究助成では、助成金交付研究者総数340名、助成金総額6億5千百3拾万円、第二の柱である国際交流助成（海外での学会発表助成）では、助成金交付研究者総数388名、助成金総額9千3百6拾5万円となりました。これに学会開催助成金などを含めまして総額7億5千9百7拾5万円の助成金を、本財団の活動理念に基づき多くの研究者の方々に交付出来ましたことは、本邦におけるバイオサイエンス発展の一助になったものとする次第であります。

さて、平成15年度の財団理事・評議員の内、永年財団活動にご献身頂きました理事長中村寛之助氏、評議員中嶋暉躬氏がご退任となり、名誉理事にご就任頂きました。引き続き財団活動へのご指導を賜りたいと存じます。平成16年度からは新理事2名、新評議員7名が就任され、また新選考委員4名が選任されました。いずれの方々も各分野の先覚者あるいは先駆的研究者であり、当財団活動の更なる展開に力量を発揮して頂けるものと楽しみにしております。

国立大学の独立法人としての新たなスタート、また大学発ベンチャーの活動、産官学の新たな研究の枠組み構築などバイオサイエンスを巡る潮流には大きな変化があります。本財団の平成16年度の活動はもう始まっておりますが、今年も出捐会社であります協和発酵工業(株)からのご寄附を有効に活用し「萌芽的あるいは先駆的研究に注目し、研究助成を続ける」という当財団の理念に則り諸事業を推進致す所存ですので、今後とも関係各位皆様のご指導ご支援をお願い申し上げます。

# I. 平成15年度事業報告

## 1. 年間の経緯（平成15年4月～平成16年3月）

### 平成15年

- 5月27日 財団パンフレット更新
- 6月6日 第30回理事会・評議員会 経団連会館  
平成14年度事業および収支決算承認
- 6月10日 第15回国際交流助成（前期）候補者選考会 学士会分館
- 6月下旬 研究助成募集開始
- 7月上旬 第20回公開シンポジウムポスター発送開始
- 8月1日 財団年報第4号（平成14年度）刊行
- 9月16日 第15回国際交流助成（後期）候補者選考会 学士会分館
- 9月30日 第15回研究助成募集締め切り
- 10月12日 第20回公開シンポジウム「がん研究・診療の最前線ーがん治療への新しい  
アプローチー」 経団連ホール
- 12月25日 研究助成選考委員会 経団連会館  
助成対象者 23名選考

### 平成16年

- 2月6日 第31回理事・評議員会 経団連会館  
平成16年度事業計画および予算決定  
第15回研究助成対象者承認
- 2月29日 理事長中村寛之助氏退任
- 3月1日 理事長平田 正氏就任
- 3月5日 第15回研究助成贈呈式 如水会館
- 3月31日 評議員中嶋暉躬氏、大塚栄子氏、小田鈎一郎氏、寺田雅昭氏退任
- 通年 第14回学会開催助成は5件に対して実施

## 2. 助成事業

第29回理事会・評議員会（平成15年2月）にて決定された平成15年度事業計画に則り助成事業として研究助成、国際交流（海外派遣）助成および学会等の開催助成を実施した。各助成における応募状況と採択率等を下表に示した。

事業名	推薦または申請件数	助成件数	採 択 率 (%)	予算総額 (万円)	実 績 (万円)
研究助成	106	23	21.7	4400	4600
国際交流助成	70	33	47.1	750	745
（前期）	47	23	48.9	580	575
（後期）	23	10	43.5	170	170
学会等の開催助成	5	5	100	100	100

### (1) 第15回研究助成

平成15年度は総額4,400万円（一人200万円22名）の予算を組み、推薦依頼先リストBグループの245研究機関の長、当財団理事（12名）および評議員（11名）計268名に推薦を依頼した。

応募件数106件につき選考委員会（平成15年12月25日開催。選考委員17名中13名出席）の厳正な審査により23名の研究助成候補者が選出された。ついで平成16年2月6日開催の第31回理事会・評議員会にて研究助成対象者が決定され、平成15年3月5日に研究助成贈呈式が施行された。助成対象者氏名・所属、研究題目を表1に示す。

### (2) 第15回国際交流助成

平成15年度の国際交流助成は例年どおり雑誌等のメディアを通し公募した。前期（平成15年5月末締め切り）・後期（平成15年8月末締め切り）それぞれ47名・23名の応募者につき選考委員会にて助成候補者が選考され、理事長・評議員会議長の承認後助成が実施された。助成対象者氏名・所属・発表学会等を表2・表3に示す。

表 1. 第15回加藤記念研究助成者

氏名	所属	職名	研究題目
石戸 聡	神戸大学大学院医学系研究科	助教授	新たな免疫制御法確立のための基礎研究
伊東 進	筑波大学基礎医学系実験病理学	助教授	ALK5knock-inマウスを用いたTGF- $\beta$ による血管新生制御機構の解明
今井 浩孝	北里大学薬学部衛生化学教室	講 師	抗酸化酵素PHGPx欠損による不妊症発症機構の解析
今福 泰浩	九州大学大学院理学研究院	助 手	多数の生物分子モーターが非線型相互作用することでおこるマクロな滑り運動の創発
岡澤 秀樹	群馬大学生体調節研究所附属生理活性物質センター	助 手	細胞機能を負に制御する新しい細胞間シグナル伝達機構「CD47-SHPS-1系」
沖野 龍文	北海道大学大学院地球環境科学研究科	助教授	シアノバクテリア由来天然物によるプロテオリシスコントロール
鬼村謙二郎	山口大学工学部応用化学工学科	助 手	バイオミメティクスによる分子認識超分子の創製
川原 敦雄	京都大学大学院医学研究科	助教授	ゼブラフィッシュを用いた造血発生を制御する新規因子の検索
岸 敏郎	島根医科大学医学部精神医学講座	助 手	エネルギー平衡の神経基盤-中枢メラノコルチン系の機能形態学的解析-
久保 友彦	北海道大学大学院農学研究科	講 師	ミトコンドリアにコードされる雄性配偶子致死タンパク質の機能解析
清宮 啓之	(財)癌研究会 癌化学療法センター基礎研究部	研究員	癌分子標的としてのテロメア長制御機構
世良 貴史	京都大学大学院工学研究科	助教授	繊維状ファージを用いた非レトロウイルス・ベクターの開発
高木 淳一	大阪大学タンパク質研究所プロテオミクス総合研究センター	教 授	インテグリン細胞外領域の高分解能電顕による可視化
外丸 詩野	北海道大学大学院医学研究科	助 手	人工的抗原提示細胞を用いた慢性ウイルス感染症における免疫反応の解析

氏名	所属	職名	研究題目
西川 武志	熊本大学大学院医学薬学研究部	助手	ミトコンドリア由来活性酸素制御による糖尿病合併症発症・進展の阻止
橋本 義輝	筑波大学応用化学系微生物育種工学	助手	ニトリル代謝系のタンパク質および遺伝子の機能解析
藤田 英明	九州大学薬学研究院細胞生物薬学分野	助手	後期エンドソーム／多胞体様構造(MVB)における膜タンパク質選別輸送機構の解明
松尾 浩民	就実大学薬学部医療薬学科代謝毒性学	助教授	エンドサイトーシス過程における特異的リン脂質ドメインの機能と膜融合調節機構の解析
松田 祐介	関西学院大学理工学部生命科学科	助教授	海洋性珪藻におけるCO <sub>2</sub> センシングの分子機構
宮田麻理子	岡崎国立共同研究機構生理学研究所	助教授	大脳皮質から視床へのfeedback投射シナプスによる視床投射細胞の作動機構
安川 秀雄	久留米大学循環器病研究所	助手	新規IL-6標的遺伝子の心筋モデリングにおける役割の解明と治療への応用
柳澤 修一	岡山大学資源生物学研究所	助教授	高等植物におけるシグナル伝達系のネットワークの解析
綿田 裕孝	順天堂大学内科学	講師	Activin応答性の膵β細胞分化シグナルの解明



表 2. 第15回加藤記念国際交流助成（前期）助成者

	氏名	所属	参加学会	開催地	助成金額 (万円)
1	足立 弘明	名古屋大学大学院医学系研究科神経内科	ゴードンカンファレンス－CAGリピート病	ヨーロッパ	30万
2	伊野部智由	東京大学大学院理学系研究科物理学専攻	第17回タンパク質学会シンポジウム	アメリカ東	25万
3	大梶 祐頼	東京大学大学院医学系研究科外科学専攻	第94回アメリカ癌学会総会	アメリカ東	25万
4	大沼 みお	東京薬科大学生命科学部細胞機能学研究室	第8回アミノ酸とタンパク質に関する国際会議	ヨーロッパ	30万
5	長内美瑞子	東京大学新領域創成科学研究科	第19回国際遺伝学会	オセアニア	20万
6	加藤創一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学	第1回FEMS欧州微生物国際会議	ヨーロッパ	30万
7	神崎 秀嗣	京都工芸繊維大学大学院ベンチャーラボラトリー	03 Cold Spring Harbor Meeting 「Eukaryotic DNA Replication」	アメリカ東	25万
8	岸 光子	東京大学大学院総合文化研究科	第7回植物分子生物学国際学会	ヨーロッパ	15万
9	小林 孝	金沢大学大学院自然科学研究科	FASEBサマーリサーチカンファレンス：織毛虫分子生物学	アメリカ東	25万
10	櫻井 文教	国立医薬品食品衛生研究所遺伝子細胞医薬部	第6回アメリカ遺伝子治療学会	アメリカ東	25万
11	佐藤 陽子	九州大学大学院医学研究院	第19回国際生化学・分子生物学会議	カナダ	20万
12	末次貴志子	東京大学海洋研究所海洋生態系部門	第10回深海生物学会	アメリカ西	20万
13	田中 文昭	北海道大学大学院工学研究科システム情報工学	第9回DNAコンピューターに関する国際会議	アメリカ中	25万
14	時本楠緒子	千葉大学大学院自然科学研究科多様性科学	国際動物音声学会	アメリカ東	25万
15	西田 敬二	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻	アメリカ植物学会	ハワイ	15万
16	能登 朋子	金沢大学大学院自然科学研究科	ヨーロッパ原生生物学会・織毛虫生物学会合同会議	ヨーロッパ	30万
17	濱田 文香	東京理科大学理工学研究科応用生物科学	第6回EMBOワークショップ	ヨーロッパ	30万
18	日渡 祐二	岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所	国際コケ植物会議	アメリカ中	25万

	氏名	所属	参加学会	開催地	助成金額 (万円)
19	宮里 実	琉球大学医学部泌尿器科	2003年アメリカ泌尿器科学会総会	アメリカ中	25万
20	諸橋 賢吾	横浜国立大学エコテクノロジー・システム・ラボラトリー	植物の配偶体：進化、発生、機能	ヨーロッパ	30万
21	山田 裕子	千葉大学大学院自然科学研究科多様性科学	国際動物音声学会	アメリカ東	25万
22	吉田 清嗣	東京医科歯科大学難治疾患研究所分子遺伝部門	第94回アメリカ癌学会総会	アメリカ東	25万
23	米田 英伸	富山県立大学工学部生物工学研究センター	タンパク質-標的、手段、治療	ヨーロッパ	30万

表3 第15回加藤記念国際交流助成（後期）助成者

	氏名	所属機関	学会名	地域	助成金額 (万円)
1	N. P. Murphy	理化学研究所脳科学総合研究センター	第33回北米神経科学学会	アメリカ中	20万
2	大西 康夫	東京大学農学生命科学研究科	第13回放線菌の生物学に関する国際会議	オセアニア	15万
3	奥村 茂樹	松本歯科大学口腔生化学講座	第43回米国細胞生物学会	アメリカ西	15万
4	邵 菁	東京大学医学部付属病院腎臓内分泌内科	第36回米国腎臓学会年会	アメリカ西	15万
5	瀬戸口啓夫	University of Cambridge Centre for Brain Repair	アメリカ頰椎外科学会	アメリカ西	15万
6	長野 清一	大阪大学医学系研究科神経内科学	第33回北米神経科学学会	アメリカ中	20万
7	縄田 涼平	山口大学大学院生体シグナル解析医学講座（第三内科）	第45回米国血液学会総会	アメリカ西	15万
8	長谷川恵子	北里大学北里生命科学研究所感染制御科学府	第43回インターサイエンス会議	アメリカ中	20万
9	藤枝 正輝	北海道大学大学院薬学研究科代謝分析学	第11回環太平洋臨床薬理遺伝学会	アメリカ西	15万
10	松本 高広	東京大学分子細胞生物学研究所核内情報	キーストンシンポジウム「核内レセプター」	アメリカ中	20万

### (3) 第14回学会等開催助成

平成15年度開催分5件の学会等に対して理事長・評議員会議長および選考委員長の承認を得て総額100万円を助成した。会議名等は下記のとおりである。

#### 1. 21世紀の環境・食糧を担う植物・微生物バイオテクノロジー

開催日 : 2003年12月12日  
場 所 : 東京大学弥生講堂一条ホール  
申請者 : 堀之内 末治(東京大学大学院農学生命科学研究科)  
推薦者 : 別府 輝彦(財団理事)  
参加者 : (海外) 2名、(国内) 約250名  
助成額 : 20万円

#### 2. 第2回若手科学者のための日中有機化学シンポジウム

開催日 : 2003年9月23日～27日  
場 所 : 伊勢志摩ロイヤルホテル  
申請者 : 磯部 稔(名古屋大学大学院理学研究科)  
推薦者 : 北原 武(財団評議員)  
参加者 : (海外) 20名、(国内) 約30名  
助成額 : 20万円

#### 3. 第3回国際蛋白分解学会

開催日 : 2003年11月10日～13日  
場 所 : ホテルグランコート名古屋  
申請者 : 水谷 栄彦(名古屋大学大学院医学系研究科)  
推薦者 : 鈴木 紘一(財団評議員)  
参加者 : (海外) 150名、(国内) 450名  
助成額 : 20万円

#### 4. 第9回国際有機化学京都会議 (IKCOC-9)

開催日 : 2003年11月10日～14日  
場 所 : 京都パークホテル  
申請者 : 楠本 正一 (大阪大学大学院理学研究科)  
推薦者 : 森 謙治 (財団理事)  
参加者 : (海外) 120名、(国内) 580名  
助成額 : 20万円

#### 5. 第7回アジア・オセアニア組織適合性ワークショップ会議

開催日 : 2003年9月16日～19日  
場 所 : 軽井沢プリンスホテル西館  
申請者 : 猪子 英俊 (東海大学・医学部)  
推薦者 : 菅野 晴夫 (財団理事)  
参加者 : (海外) 150名、(国内) 350名  
助成額 : 20万円

### 3. 研究助成贈呈式

第15回加藤記念研究助成贈呈式は、平成16年3月5日（金）15時から如水会館（千代田区一ツ橋）において助成者（22名出席）、財団関係者・来賓他ほぼ70名の参加のもとに開催された。

式次第としては理事長挨拶、飯野選考委員長の選考経過報告に続いて、理事長から受領者一人一人に助成金目録および記念盾が授与された。引き続き文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長戸谷一夫氏から祝辞が述べられ、その後助成金受領者12名から助成対象となった研究計画の発表に移った。

一人7分の持ち時間であったが、それぞれ研究の背景、計画、成果への期待など分かりやすく説明され好評であった。

主な出席者（敬称略）：戸谷一夫（文部科学省・ライフサイエンス課課長）、松田 譲（協和発酵・社長）、手柴貞夫（協和発酵・常務）

財団関係者：木下祝郎（名誉会長）、松井正直（名誉理事）、平田 正（理事長）、小室敏雄（常務理事）、大村 智（理事、以下同）、森 謙治、大塚栄子（評議員、以下同）、小田鈎一郎、折茂 肇、北原 武、三品昌美、中嶋暉躬、飯野正光（選考委員長）、長澤寛道（選考副委員長）

当財団OB： 田中正生、岡 徹夫

#### (1) 理事長挨拶

理事長 平田 正

本日は多数ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。私は中村前理事長の後任といたしまして、2月定例理事会におきまして理事長を拝命いたしました平田でございます。よろしく願いいたします。贈呈式を始めるに当たりまして理事長として一言ご挨拶を申し上げたいと存じます。

加藤記念バイオサイエンス研究振興財団は、協和発酵の創立者であります加藤辨三郎博士の「バイオサイエンスを通じて社会の発展に寄与したい」という強い念願を実現すべく、協和発酵の創立40周年を記念いたしまして、1988年12月に設立された財団でございます。爾来15年間、当財団はわが国のバイオサイエンス発展を願ひまして若手研究者への研究助成、国際交流助成および公開シンポジウムの開催という3つの事業を継続してまいりました。その中でも特にサイエンスの発展には若い頭脳が要求されるという認識から、若手研究者への研究助成をもっとも重要な事業として位置付けてまいりました。

科学技術の振興無くして21世紀の発展は無いという認識から、政府においては科学技術基

本計画が立案されまして、現在は平成13年度からの第Ⅱ期科学技術基本計画というグランドデザインに沿いまして、科学技術および学術の振興が図られているわけでございます。中でもこのライフサイエンス・バイオテクノロジー分野におきましては、一方では産業界からも強い要望もありまして、平成14年度に内閣府に設けられましたバイオテクノロジー戦略会議によりまして、バイオテクノロジー戦略大綱が策定されております。ご承知かと思いますがこの大綱は3つの基本戦略からなっております。ひとつは研究開発の圧倒的な充実と、2点目として産業化プロセスの抜本的強化、そして最後に国民理解の徹底的浸透、この3点からなっておりますけれども、昨年からその本格的な実施に移されつつあるわけでございます。

このように科学技術、とりわけバイオテクノロジーを推進しその成果を社会に還元して行く枠組みが整いつつあります。これからは産官学の連携によりまして、如何に実を挙げていくかが問われる段階と思えます。しかし良く考えてみますと、こういうバイオテクノロジーの成果を社会が享受するためには、そもそもそのシーズを生み出す基礎研究が盛んに行われなければなりません。特にライフサイエンスの研究分野におきましては、生命現象に対する知的好奇心とそれを解明しようという飽くなき探求心がとりわけ重要であろうと思えます。過去の単なる蓄積の積み重ねではなく、柔軟で先入観にとらわれない若い研究者の独創的な研究からそれらのシーズは生まれてくる事が期待されているものと思えます。当財団はそのような研究に着目し、その発展に少しでも役に立つ事を念じまして研究助成活動を継続して行く所存でございます。

昨今の経済情勢には誠に厳しいものがございますけれども、幸い当財団は協和発酵工業株式会社から多大なご支援をいただき、それによって本年度も継続的な研究助成事業を行う事が出来ました。また皆様のご協力によりまして、この財団の評価も着実に高まってまいりまして若手研究者の助成事業には、例年多数の応募をいただいております。その結果今年度は国際交流助成では、70名の応募に対しまして33名の方に総額745万円を、学会開催助成は5件100万円の助成をいたしております。また本日の研究助成では106名の応募に対し23名の方々に総額4600万円と記念の盾を贈呈いたす事になりました。本日助成を受けられる皆様方の研究が、皆様の創意と情熱により着実に進展し5年後10年後には大きな果実を結び、わが国のバイオサイエンスの進歩ひいては日本の産業の礎として発展されるよう期待いたしております。またご陪席の皆様方にも助成を受けられます若き研究者の今後の発展を祈念して励ましの言葉をおかけいただければ幸いです。

終わりに本研究助成の選考に当たられました選考委員長の飯野正光先生をはじめとする17名の選考委員の諸先生方に篤く感謝申し上げます。また本日は当財団の主務官庁でございます文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長戸谷一夫様にもご陪席いただいております。ご多用の中おいでいただきまして本当にありがとうございました。また本日ご陪席の皆様

は、加藤記念バイオサイエンス研究振興財団に対しまして今後とも一層のご支援ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます、私のご挨拶といたします。どうも有り難うございました。

## (2) 選考経過報告

選考委員長 飯野 正光

ただ今ご紹介頂きました、選考委員長を勤めさせていただいております東京大学医学系研究科の飯野と申します。

理事長からちょっと説明があったと思いますが、今年は106件の申請がございまして去年より増えております。申請書は17名の各領域の非常に高名な選考委員の先生にまず書類審査をして頂き、最後に全員が集まりまして詳しく審査いたしました。大変質の高い研究が多かったものですから、しばしば選考委員同士で激論も戦わされました。その結果今年は23件採択という事になりました。実は例年22件の採択ですけれども、今年はどうしても優劣のつけがたい申請がありまして、投票した結果も同数という事で、どうしてももう1件増やして頂きたいと要望し23件という事になりました。

したがって106件から23件という5倍ほどの競争率ではあるのですが、これは各研究機関から1件の申請ということになっていますので、多分研究機関によっては研究機関の中でコンペティションがあったのではないかと思います。従いまして実質的には5倍を超えるような競争率という事になりますので受領者の皆様には誇りを持って頂いてよろしいのではないかと思います。

話は変わりますが、国立大学は来月から法人化という事になります。国立大学はそのための準備をしており、東京大学も先ほどお話のありました産学連携という事で、昨日産学連携のシンポジウムというものがありません。私もそれに関係した小さな委員会に属しており、勉強のため話を聞いてきたのですが、そのとき演者の先生がこういうことをおっしゃっていました。企業の事が話に出まして、企業の目的というのは利潤の追求である、つまり金儲けである。金儲けという事が企業が成立する事と思っていたけれども、良く調べてみると、金儲けを第一の目標としているところはあまり業績が良くない。むしろ金儲け以外の事を目標としているような企業が、それをしたいがために金儲けをしている会社のほうが業績が良いのだという話を聞きました。私は金儲けは不得意ですので、これにコメントする立場ではないのですが、これをサイエンスに当てはめてちょっと似ているところがあるのではないかと思います。サイエンスというのは、究極的には私達人間の為になるのではないかと思います。私も医学部に居りますので、私のやっている研究が患者さんの役に立てばと思っていますが、それだけを考えていますとやはり見方が狭くなるというか、領域が狭くなっていくのではないかと。やはり平田理事長がおっしゃいましたように、知能・知的探求心というか、これを知りたいこれが分かってないから何とか分かってやろうという、そ



う気持ちがやはり非常に大切ではないか。山を大きくするという事は大切なのですが、裾野を広げるといふ事が非常に大事であると私は思います。そういう意味で加藤記念財団の掲げている目標というのは、非常に達観してしまして、今すぐ役に立つという目標ではなくて、将来もしかして何かに役に立つのではないかという物をえらんでくださいと言われてしまして、そういう意味では裾野を広げることには役に立つ研究助成ではないかと思ひます。実際選考の過程におきましても、これは本当に大丈夫だろうかという事もありましたが、これだけの事を書いてきているので何かやってくれるだろうと期待を持って選考した案件もございます。このように非常に間口の広い研究助成を運営して下さっています、加藤記念財団に敬意を表するとともに、受領者の皆様には今の場所で、山を築いていただいて、それをどんどん大きな山にしていただく事をお願いいたしまして、選考結果の報告とさせていただきます。どうもありがとうございました。

### (3) 祝 辞

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課課長 戸谷 一夫

ただいまご紹介いただきました文部科学省ライフサイエンス課長の戸谷でございます。まず始めに、本日加藤記念バイオサイエンス研究振興財団のほうから研究助成の贈呈を受けられた研究者の皆様方に対しまして、心からお喜びを申したいと思ひます。またこのような意義ある事業を長年継続されています財団に対しまして深く敬意を表すると共に、財団の活動を支えてこられた協和発酵を始めとする関係者の方々のご尽力にも敬意を表する次第でございます。ここにお集まりの皆様にも申し上げるまでも無く、21世紀、生命科学の時代ということで、世界各国におきまして生命科学への取り組みが格段に強化され、一面熾烈な国際競争といったような面もあるわけでございます。当財団の創設者であります加藤辨三郎先生がかねてから主張されていたことが、まさにここに現実のものになっていることですので、加藤先生の先見性といったものには、改めて敬意を表します。特に加藤先生におかれましては、国がライフサイエンス研究に取り組もうとしている状況におきまして、その草創期に格段に政策的な面でのご提言ご指導をいただいていたということがございまして、旧科学技術庁の時代からもそういったことで色々お付き合いをさせていただいたこともございます。文部科学省といたしましても、生命科学研究の振興につきましては、格段に予算的な面からも強化をしている状況でございます。文部科学省の研究費の予算の中でも生命科学の分野といったことでは、科学研究補助金等の実績の配分等々も鑑みますと、全体で2000億円以上この分野に研究費として投入されているということでございます。また政府全体ということで見ますと4000億円以上という計算になっております。もちろん米国等における研究費の投入と比較いたしますと、まだまだ規模としても少ないといったことで、先ほどお話のありましたバイオテクノロジー戦略会議におきましても研究開発の圧倒的な充実といったようなことも謳

われているわけですが、日本の科学技術関係の予算の中で、4000億円以上の配分というものは巨大科学と言われているような宇宙開発の予算への投入規模をはるかに上回っているという状況に到っているということを申し上げておきたいと思います。先ほどバイオテクノロジー戦略大綱の話もあったわけですが、こういうことで政府全体としても更に一層の取り組みの強化を図るということでございまして、文部科学省におきましてもタンパク3000とか再生医療、バイオバンクの形成を目指したテーラーメイド医療あるいは平成16年度からゲノムネットワーク研究といったようなことで、以前ではライフサイエンスの分野ではなかなか考えられなかったような大規模プロジェクトといったようなことも進行している状況にあります。

研究の一番大事な点ということですが、基本的には研究者の皆様方の個人個人の真の独創性の発揮といったものが一番の根幹ではないかと思えます。特に20歳代後半あるいは30歳代といった非常に油の乗った時期に独創性を発揮して、極めて重要な業績を残す研究者の方が多いといったことはよく言われていることではないかと思えます。生命科学の分野でも、例えばワトソンとクリックが非常に若くしてDNAの二重螺旋構造を発見したと、50年前になりますけれど、そういうことも非常に有名な事実としてあるわけですが、国のほうといたしましても、若手研究者の支援というのは、ここ数年来キャッチフレーズとして語られるいろんな施策の強化ということになっておりますけれども、そういう風になっているかということについてはまだまだ十分ではないというご批判の方が強いのではないかと思っております。この財団におきましては、この点に極めて早くから着目して今回もこれで15回目ということだそうでございますけれども、特に若手の研究者の方々に特化してこういう事業を行っておられるということは、大変意義深いことだと思います。

本日研究助成金を贈呈された研究者の皆様方におかれましては我が国における生命科学の振興が21世紀の日本を支えていく非常に重要な学問分野になっている、このことについてはおそらく深くご認識をされていることとは思いますが、この点一層ご認識を深めて更に一層のご精進によって研究に励まれるということを強くお願いしたいと思っております。生命科学への期待というものが、やはり高齢化問題、食糧の問題、あるいは健康への問題、広汎に我々が今抱えている課題の解決にとって非常に基礎となる重要な学問でございますし、学問自身がフロンティアとして他の学問を引っ張っていく学問であると、そういうことではないかと思えます。当然研究の分野におきまして皆様方は実際にやっておられるところで、最先端のところを目指してやっておられるというのは本当に当然のことではありますし、そのことについては今後とも一層やっていただくかと思えますけど、一点先ほどのお話からは別な視点から申し上げますと、社会的な課題と言いますかあるいは社会的な期待と言いますかそういうようなことにも少しどこか頭の片隅でご配慮いただきたい。そのことは短期的に具体的に何か役に立つかということで申し上げているのではなくて、研究というのはある意味

で非常にパブリックなもので、国民全般が今の最先端の研究と乖離をしているような所があって、そのことについては私どもとしても深く反省をしなければいけない所でございますけれども、研究者の方々も社会全体の中でこういう先端的な研究がやはりどういう位置付けにあって、そのことが大きな意味でどういう風に役に立っているのかといったようなことを常に、機会があればそういうことも説明をしていただければありがたいということでもあります。大変口幅ったいようなことも申し上げましたけれども、改めまして皆様方にご依頼申し上げますと共に、当財団の今後一層のご発展を祈念いたしまして私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

#### (4) 祝賀パーティ

贈呈式が滞りなく終了し、助成対象者と財団関係者の記念撮影後、17時10分祝賀パーティの開催となった(如水会館・富士の間)。

最初に当財団の出捐者である協和発酵工業(株)代表取締役松田 譲氏のご挨拶を頂いた。松田社長は、協和発酵の創業の歴史に触れられ、ストレプトマイシンの国産、アミノ酸発酵の発明など常に社会への貢献をベースに事業を展開しているとの企業活動の説明に続き、ある文学賞を受賞した作家の言葉に触れ「賞は貰ったあとの評価が問われる」とのアナロジーから、今回助成金を受領された研究者は当然助成されたその研究の成果が評価されるので、多いに研究に励んで頂きたいとエールを送られた。

続いて当財団の森 謙治理事からは、助成受領者に対してお祝いの言葉とともに記念盾に書かれている人は「生かされている」ことの認識が大切であるとの研究者の持つべきマインドの重要性が述べられ、高らかに乾杯のご発声となった。

会は和やかな内にも、真摯なディスカッションもあちこちで行われ、研究者の交流もサイエンスでは成功の重要な要素であることを実感させられる会となった。

19時定刻となり、小室敏雄常務理事から出席者への感謝の辞が述べられ、パーティは盛会裏に終了した。

## 4. 加藤記念公開シンポジウムの開催

第20回加藤記念シンポジウムは、平成15年10月11日（土）13時から例年どおり経団連ホール（経団連会館）にて開催された。

### (1) 開催にあたって

#### i. テーマ選定の経緯

がん（悪性新生物）は、依然として日本における死亡原因のトップであり、死亡者が年間30万人を超える克服すべき重要な疾患であり、世界的に活発な研究・診療がなされているところである。わが国においては平成6年度より「ガン克服新十ヶ年戦略」に基づきさまざまな施策が実行されており、また平成16年度からの「第三次対ガン戦略」が、文部科学省と厚生労働省の合同で検討されている。

現今のライフサイエンスの進展は、象徴的にはヒト・ゲノムの解読完了宣言が本年4月になされるなど、目覚ましいものがある。このような科学の発展が「がん研究・診療」に現在どのように反映されているのか、あるいは今後どう反映されるのかを俯瞰することは時期的にも重要なことであるとの認識から、がんへの、特にがん治療への新しい挑戦を主たるテーマとしてシンポジウムが企画された。

従って本シンポジウムは「がん研究・がん診断・トランスレーショナルリサーチ・ロボット医療をふくめた新しいがん治療の試み」と広範な「がん研究・診療」の最前線の一端を明らかにしようとするものである。

またトランスレーショナルリサーチの推進が重要であるとの認識から、英国のがん研究所から講師を1名招き海外における研究も紹介することも企図した。

#### ii. シンポジウムの進行状況

最初に中村財団理事長から『「がん」はとりわけ国民の関心が高い医療分野であり、また近年研究の進展が著しい分野でもあり、第一線の先生方から「がん」克服の現状と展望が語れるのを楽しみにしている』旨の挨拶を頂いた。

オーガナイザーで第1番目の演者である寺田雅昭先生は、『がん死亡数は先進国のみならず発展途上国においても増加しており、がん克服は人類共通の願いである。しかし治療の進歩、がん予防対策によりアメリカでは3年前から死亡率は減少傾向にあること、また近年のヒトゲノム解析の進歩等によるがん研究の進歩が、新しいがんの治療法・予防法の開発に大きなインパクトを与えている』ことが述べられ、本シンポジウムでは『生物学の発展を基盤としたがん研究の進歩とその治療への応用とともにコンピューター科学を基にした診断・医

療工学の進歩と応用について、各分野の代表的な研究者からその展望を含めてお話を頂くことにより、がん研究と診療の最前線が理解されるであろう。』と本シンポジウムの位置づけをして頂いた。

第2番目の演者である森山紀之先生は、「最新の画像診断」と題し、『がんの画像診断はがんの鑑別・病期診断のみならず、治療計画の策定・治療効果判定など広く利用されている技術であり、その種類もX線を利用したもの（単純X線撮影、X線CTなど）、磁場を利用した核磁気共鳴画像（MRI）、超音波検査（US）、ラジオアイソトープを利用したRIシンチグラフィなど多岐に渡っている。これらの技術を、頭頸部・神経系、胸部、胆・肝・膵、乳房など各領域に適した診断法を適用するかたわら新たな画像処理技術の進歩により、より非侵襲的な手法の開発がなされている。また近年開発された新しいRI検査としてのPETの臨床応用、画像診断で得られるデジタル画像情報をコンピューターの特殊な画像処理による三次元画像としての表示やコンピューター支援自動診断にも利用するなど診断技術にも著しい進展がある』とコンピューター科学による診断技術の著しい飛躍を解説・展望された。

第3番目の演者である中村祐輔先生は、「ゲノム解析に基づく分子標的治療薬の開発」と題し、『ゲノム研究の進展により従来の「個の遺伝子研究」から多数の遺伝子を同時に取扱う「ネットワーク的遺伝子研究」が可能となった。27,600ものヒト遺伝子のcDNAマイクロアレイを独自に開発し、またがん組織からLaser Microbeam Microdissectionを利用してがん細胞を選択的に抽出することによりがん細胞特異的な体系的発現情報を解析しデータベースを構築できた。これに基づきある臓器がん患者に共通して発現変動を示す遺伝子を同定し、その遺伝子産物の機能解析により分子標的を特定することが可能となった。現時点で数十の候補遺伝子の同定に成功し、ペプチドワクチンの開発・臨床研究、抗体治療薬の作成、さらに分子標的治療薬のスクリーニングが進行中であり、これらの成果が将来の「がんのオーダーメイド医療」すなわちがん患者一人一人のきめ細やかな治療に繋がっていくものと期待される』と展望された。

第4番目の演者であるPaul Workman先生は、「Molecular therapeutics : Translating new targets from lab to clinic」と題して、『ヒトゲノム解析に続き、がん細胞の変異遺伝子解析が進化した結果、いかに遺伝子異常の組み合わせが、細胞増殖にかかわる基本的プロセスの決定的なパスウェイを乗っ取ることによって、様々なヒトがんを操っているかが分かってきた。これらのがん遺伝子やパスウェイを選択的に制御することで効果が増強し副作用が少ない臨床的に有用な抗癌剤をもたらすであろう。このアプローチが有効なことはGleevec、Herceptin、Iressaなどにより例証されているが、問題は多くのがんは幾つもの遺伝子異常によって引き起こされているため最大限の効果を得るためには、個々の異常を抑える薬剤をすべて投与するカクテル療法が必要となる。代案としては、一剤で全ての異常に対応できる

ような分子標的薬、たとえば分子シャペロンやproteasome阻害剤かクロマチン構造の修飾剤が使用可能かもしれないと考えられる。この考えで幾つかの阻害剤が臨床或いは基礎研究の段階にある。ポストゲノムとしての抗がん剤開発の重要な点は分子標的の同定と治療すべき患者の選択を個々のがん分子プロフィールに基づいてなすべきことであり、mRNA、transcriptomeの解析やDNA microarray技術などの開発が必須である。これらの解析により、初めてがん細胞の感受性に関与する遺伝子、また分子標的治療剤のpharmacodynamics、あるいは治療効果の予後マーカーを規定する遺伝子を同定できるからである。』と述べ、実際にlabから clinicへ移り研究されているHSP90阻害剤などの実例を詳述され、また今後は、“personalized prevention, diagnosis and treatment” が指向されると述べられた。

第5番目の演者である曾根三郎先生は、「肺がんの多臓器転移に対する分子標的制御の戦略」と題して『日本において増加の著しい肺がん—男性18万人、女性12万人—は、診断時に多臓器への遠隔転移があり、また化学療法に対する難治性のため男性死亡率の第1位に挙げられている。近年臨床使用されるに至ったゲフィチニブ (Iressa) は、epidermal growth factor (EGF) 受容体の阻害剤であるが、日本人の非小細胞肺癌では29.5%の奏効率を示し、有効症例は、全身状態が良い、肺腺癌、女性に多い、ある種の肺腺癌 bronchioalveolar carcinoma 症例では画期的な臨床効果が確認されているなど注目の分子標的薬剤である。また有効症例の追跡により、EGF受容体がリン酸化されている症例は再発までの期間が短いことが確認されている。一方 重篤な肺障害も報告され、間質性肺炎発症による死亡も約1%の頻度で見られ、慎重な投与が求められている。このような状況で肺癌がどのように進展しているか分子レベルで解明できれば分子標的制御が可能になることから、薬物応答性遺伝子の探索あるいは肺毒性発現情報に関する遺伝子多型SNPs解析が現在進行中である。一方肺癌の難治である原因の一つ、多臓器転移に対する対策を立てる為に、多臓器転移モデルをNK細胞欠失SCIDマウスで再現することに成功し、肺癌の転移した各臓器の遺伝子解析を、cDNAマイクロアレイを用いたクラスター解析により、肺、肝、骨、腎などの臓器ではそれぞれ異なった遺伝子群を使って癌細胞の転移・定着が起こっていることを明らかにした。これらの成績を考慮すると将来進行した非小細胞肺癌に対して単なる組織型だけでなく遺伝子プロファイルを個々の症例で解析することで個別化医療を目指すことが可能となることが示唆される』と述べられた。

第6番目の演者である高上洋一先生は、「同種免疫細胞を用いたがん治療」と題し、『白血病における造血幹細胞移植療法において、移植後に移植片対宿主反応 (GVHD) を合併した患者では白血病再発率が低下し、また移植後に再発した白血病に対してはdonor lymphocyte infusionが奏効することから、ドナーリンパ球を始めとする免疫担当細胞を介したgraft-versus-tumor (GVT) 効果が重要な役割を担うとの考えが確立した。同種幹

細胞移植後に起こる反応は、早期に起こる非特異的な炎症反応と、その後に発生する特異的免疫反応に大別されるが、これらの反応が複雑に絡み合ってGVT効果となって現れるものと考えられ、このGVT効果を積極的に前面に押し出し、抗がん剤量を減量したミニ移植が開発された。

臨床応用は造血器腫瘍、さらに固形腫瘍と試みられ、白血病に対する治療効果は通常移植と遜色がないことが判明している。このミニ療法は移植関連毒性が減少する為高齢者や臓器障害を有する患者にも適応があり、骨髓異形性症候群（MDS）を対象とした治療では、患者の平均年齢は従来法の35歳から52歳へと拡大された。ミニ移植の開発を契機に新たな免疫療法の開発も進められており、ミニ移植による免疫賦活にワクチンやサイトカイン療法を追加する治療法も試みられている。今後の問題点としては、ドナー細胞の確保が挙げられるが東京移植コンソーシアムが形成され、臍帯血移植の促進が図られている。』と述べ、さらにこれら新しい治療法の開発には医師主導臨床試験におけるGCP基準に基づいたデータ管理技術とネットワークが不可欠であると指摘された。

最後の演者である森川康英先生は、「がんの低侵襲外科手術—内視鏡下手術からロボット工学医療へ—」と題して、まず内視鏡外科の歴史に触れ『内視鏡外科は麻酔や滅菌法に比肩するまさにbreak throughと位置づけられる治療技術であり、この技術が普及したのは、その低侵襲性が患者と社会のニーズに合致した為である。体腔内を見るための技術は、特に日本におけるfiber scopeの開発により、診療技術の到達点といえる。しかしこの技術は患者にとって低侵襲であることの裏腹に、術者である医師にとってきわめて負担の大きい診療技術であり、外科手術と異なり内視鏡外科には、かん子先端に自由度がないことと手術にとって重要な術者の手の感覚、触覚を欠如していることの大きな問題点があった。現在臨床応用が行われている手術用ロボットはマスタースレーブマニピュレータではまだ装置が大型であることや触覚を欠如するなど改良の余地があり、その問題点を解決する為マスター・スレーブ一体型ロボットかん子の開発に取り組み、小型化とともに組織への負荷の少ない縫合およびかん子のグリッパーにおける触覚と臓器至適結紮力の提示に成功している。またこのロボット治療の進歩は、単に低侵襲性であるばかりではなく、たとえばがん治療におけるsentinel nodeの概念と一体化したsentinel node navigation surgeryというようながん治療におけるリンパ節郭清の在り方を変革するきっかけともなりうる。Haptics(触知覚)を伴うマスタースレーブマニピュレーター技術の成果は、さらに多くの分野の臨床・研究のニーズと融合することにより、たとえば肝がんのcryoablationの広範囲化、胎児手術など他部門へと応用されるであろう。今後ますますその適応・経済性・教育の総合的な取り組みが期待される』と展望された。

最後にオーガナイザーである鶴尾 隆先生から、本日の講演により現在のゲノム科学の進歩・コンピューター科学の進歩により、がんの基礎研究・臨床研究ともに新しい発展がなさ

れつつある現状が良く理解できたこと、さらに近い将来がん患者に新しい治療法が提供される気運が高まっており、がん予防とあいまってがん克服の研究が益々盛んになるであろうとのまとめと展望がなされ、また本シンポジウムが多数の方の参加により成功裡に終えられることへの謝辞が述べられ、定刻閉会となった。

### iii. 懇親会（18:10から経団連会館10階 ルビールーム）

シンポジウム参加者全員に講演者を囲んで交流する場を提供する趣旨によりシンポジウムに引き続き懇親会が開催され、ほぼ100人が参加された。

会の冒頭に、当財団の出捐企業である協和発酵・松田 譲社長から、「協和発酵はその創業時の精神、即ち人々の健康に資する為にストレプトマイシンを国産し、食糧事情の改善の為にアミノ酸（たんぱく質）の製造法を発明したように、ライフサイエンスの発展により社会に貢献するという精神で今後とも財団の活動を支えていく」との心強いご挨拶を頂いた。

次いで財団理事である癌研究会癌研究所の菅野晴夫先生からシンポジウム関係者への感謝の辞と乾杯のご発声を頂き、懇親会は早速活気ある交流会となった。

今回もまた談論風発の熱気溢れる会であったが、定刻閉会となった。



## (2) 講演プログラム

テーマ : 「がん研究・診療の最前線ーがん治療への新しいアプローチー」

日時 : 平成15年10月11日(土) 13:00~18:00

会場 : 経団連ホール(東京都 千代田区 大手町)  
地下鉄 大手町駅下車 1分 Tel 03-3479-1411

主催 : (財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後援 : 文部科学省・厚生労働省・日本癌学会・日本癌治療学会

オーガナイザー : 寺田 雅昭 (国立がんセンター名誉総長)

: 鶴尾 隆 (東京大学分子細胞生物学研究所教授)

### プログラム

#### 開会の挨拶

中村 寛之助 財団理事長

#### ① がん研究の現況

寺田 雅昭 国立がんセンター名誉総長

#### ② 最新の画像診断

森山 紀之 国立がんセンター中央病院放射線診断部長

#### ③ ゲノム解析に基づく分子標的治療薬の開発

中村 祐輔 東京大学医科学研究所ヒトゲノム解析センター教授

#### ④ Molecular therapeutics : Translating new targets from lab to clinic

Paul Workman The Institute of Cancer Research, Sutton, U K

#### ⑤ 肺がんの多臓器転移に対する分子標的制御の戦略

曾根 三郎 徳島大学医学部分子制御内科学教授

#### ⑥ 同種免疫細胞を用いたがん治療

高上 洋一 国立がんセンター中央病院薬物療法部医長

#### ⑦ がんの低侵襲外科手術ー内視鏡下手術からロボット工学医療へー

森川 康英 慶應義塾大学医学部外科学助教授

#### まとめ

鶴尾 隆 東京大学分子細胞生物学研究所教授

# 5. スナップ写真

## (1) シンポジウム



挨拶する中村理事長



盛会の会場



座長の寺田・鶴尾両先生

第20回 加藤記念公開シンポジウム  
**がん研究・診療の最前線**  
 がん治療への新しいアプローチ

平成 15年 10月 11日(土) 13:00~18:00 経団連ホール 入場無料  
 池田大学東区部A1館11号ホール(池田) 池田駅西口徒歩1分  
 総席数14席 観席1210席

主催：財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団  
 協賛：文部科学省・厚生労働省・日本癌学会・日本臨床癌学会  
 オークライザー  
 寺田 雅昭 (先端医療センター センター長)  
 鶴尾 隆 (東京大学分子細胞生物学研究所 教授)

開会の挨拶 中村 真之助 財団理事長 13:00  
**がん研究の最前線** 寺田 雅昭 先端医療センター センター長 13:05  
**最新の治療診断** 鶴尾 隆 東京大学分子細胞生物学研究所 教授 13:50  
**ゲム解析に基づく分子標的治療薬の開発** 中村 祐輔 東京大学理学部化学系 14:05  
 Molecular Cancer Therapeutics: Translating new targets from lab to clinic Paul Workman The Institute of Cancer Research, UK 15:00  
**肺がんの多量転移に対する分子標的制癌の戦略** 宮根 三郎 徳島大学理学部分子細胞生物学 教授 15:50  
**同種免疫細胞を用いたがん治療** 高上 洋一 徳島がんセンター中央病棟腫瘍療法科 16:30  
**がんの低侵襲外科手術** 一内 眞司 徳島大学理学部分子細胞生物学 教授 17:10  
**まとめ** 鶴尾 隆 東京大学分子細胞生物学研究所 教授 17:50

参加方法  
 名称、参加費、内容、申し込み方法、観覧席申し込みの上、両席  
 フォクスまたはメールで申し込みをお願いします。申し込み  
 料金は郵送で発行致します。申し込み(200名)になり次第  
 締め切ります。申し込み：平成15年10月18日(水)

(財)加藤記念バイオサイエンス研究振興財団  
 〒104-8533 東京都中央区晴海3-6-6  
 電話 042-725-2376 FAX 042-725-8614  
 E-mail kato.zaiden@kyowa.co.jp

ポスター



会場風景

演者



中村先生



高上先生



Dr. Workman



森山先生



曾根先生



森川先生

懇親会風景



## (2) 研究助成贈呈式



平田理事長



飯野  
選考委員長



文部科学省  
戸谷 課長



研究助成者と財団関係者



研究発表する助成者



挨拶する協和発酵  
松田社長



祝賀パーティー風景



## 6. 平成15年度収支決算報告

### 収支計算書

平成15年4月1日～平成16年3月31日

単位：円

科 目	予 算 額	決 算 額	差 異	備 考
I 収入の部				
1 基本財産運用収入	4,010,000	4,817,307	△ 807,307	
2 運用財産運用収入	30,000	8,847	21,153	
3 運用財産収入	70,000,000	75,000,000	△ 5,000,000	
当期収入合計 (A)	74,040,000	79,826,154	△ 5,786,154	
前期繰越収支差額	8,770,000	13,496,566	△ 4,726,566	
収入合計 (B)	82,810,000	93,322,720	△ 10,512,720	
II 支出の部				
1 事業費	69,000,000	69,656,069	△ 656,069	
研究助成	44,000,000	46,000,000	△ 2,000,000	
国際交流助成	7,500,000	7,450,000	50,000	
普及啓発費	8,000,000	7,060,590	939,410	
事業促進費	8,300,000	7,640,829	659,171	
年報出版費	1,200,000	1,504,650	△ 304,650	
2 管理費	9,800,000	9,089,943	710,057	
会議費	1,000,000	703,109	296,891	
旅費交通費	4,000,000	2,393,731	1,606,269	
人件費	3,600,000	3,600,000	0	
什器備品費	200,000	0	200,000	
通信費・消耗品費等	1,000,000	2,393,103	△ 1,393,103	
3 予備費	500,000	0	500,000	
当期支出合計 (C)	79,300,000	78,746,012	553,988	
当期収支差額 (A)－(C)	△5,260,000	1,080,142	△ 6,340,142	
次期繰越収支差額(B)－(C)	3,510,000	14,576,708	△ 11,066,708	

## II. 平成16年度事業計画

平成16年度の事業計画は、平成16年2月6日（金）開催の第31回理事会・評議員会にて審議の上、承認された。主要事業は次の通りである。

### 1. 助成事業

#### (1) 第16回加藤記念研究助成

助成対象者：平成16年度はAグループの研究機関から募集

助成金額：4,400万円（1件200万円、22件）

推薦者：当財団理事、評議員または申請者の所属する機関の長

応募締切り：平成16年9月30日

選考委員会：平成16年12月24日

助成金贈呈：平成17年3月4日

#### (2) 第16回国際交流助成

助成対象者：公募

助成金額：前期580万円、後期170万円

推薦者：申請者の所属する機関の長

募集期間：前期 平成16年4月～5月末（4月～9月までの学会を対象）

後期 平成16年4月～8月末（10月～翌年3月までの学会を対象）

選考委員会：前期 平成16年6月14日、後期 平成16年9月

#### (3) 第15回学会等の開催助成

助成対象：非公募。当財団の理事または評議員の推薦による。

助成金額：100万円（1件20万円程度、5件程度）

### 2. 普及・啓発事業

#### 第21回加藤記念公開シンポジウム

テーマ：「RNA生物学の最前線 – 遺伝子発現をめぐる新しい展開–」

日時：平成16年10月2日（土） 13：00～18：00

会場：経団連ホール（東京都千代田区大手町）

地下鉄 大手町駅下車 1分 Tel 03-3479-1411

主催：（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後援：文部科学省・日本生化学会・日本RNA学会・日本薬学会

オーガナイザー

勝木 元也（自然科学研究機構 基礎生物学研究所長）

大野 睦人（京都大学ウイルス研究所教授）

## プログラム

開会の挨拶 平田 正 財団理事長

① はじめに

勝木 元也 自然科学研究機構 基礎生物学研究所長

② 翻訳における tRNA 修飾塩基の役割：ミトコンドリア病を例にして

渡辺 公綱 （独）産業技術総合研究所生物情報解析センター長

③ RNA 核外輸送の多様性と制御

大野 睦人 京都大学ウイルス研究所教授

④ ミツバチ脳から同定された2つの新規なRNA様因子：

非翻訳性核RNAと攻撃性に関連するRNAウイルス

久保 健雄 東京大学大学院理学系研究科教授

⑤ 小分子RNA依存性遺伝子発現制御に関わるArgonaute因子の機能的役割

塩見 美喜子 徳島大学ゲノム機能研究センター助教授

⑥ The Unfolded Protein Response

Peter Walter Professor & Chair, UCSF, U.S.

⑦ まとめ

大野 睦人 京都大学ウイルス研究所教授



### 3. 平成16年度事業予算

#### 平成16年度収支予算書

平成16年4月1日～平成17年3月31日

単位:円

科 目	平成16年度 予 算 額	平成15年度 予 算 額	差 異	備 考
収入の部				
基本財産運用収入	4,200,000	4,010,000	190,000	基本財産の運用
運用財産運用収入	20,000	30,000	-10,000	
運用財産収入	75,000,000	70,000,000	5,000,000	
基本財産収入	0	0	0	
当期収入合計A	79,220,000	74,040,000	5,180,000	
前期繰越収支差額	8,510,000	8,770,000	-260,000	
収入の部合計B	87,730,000	82,810,000	4,920,000	
支出の部				
1. 事業費				
研究助成	44,000,000	44,000,000	0	シンポジウム開催費、 学会開催助成
国際交流助成	7,500,000	7,500,000	0	
普及啓発等	8,000,000	8,000,000	0	
年報出版費	1,500,000	1,200,000	300,000	
事業促進費	8,000,000	8,300,000	-300,000	
事業費合計	69,000,000	69,000,000	0	
1. 管理費				
会議費	1,000,000	1,000,000	0	理事・評議員会開催費
旅費交通費	4,000,000	4,000,000	0	役員及び事務局旅費
人件費	3,600,000	3,600,000	0	財団分担金
什器備品費	200,000	200,000	0	
通信費、消耗品費等	1,000,000	1,000,000	0	印刷費等諸費用
管理費合計	9,800,000	9,800,000	0	
基本財産繰入支出	0	0	0	
予備費	500,000	500,000	0	
当期支出合計C	79,300,000	79,300,000	0	
当期収支差額A-C	-80,000	-5,260,000	5,180,000	
次期繰越収支差額B-C	8,430,000	3,510,000	4,920,000	

### Ⅲ. 研究助成者からの報告

#### 1. 研究助成

当財団では、研究助成金受領から3年後に助成対象となった研究の成果報告を受けることになっている。以下に第12回（平成12年度）並びに第13回（平成13年度）の研究助成者からの報告を掲載した。なおこの研究報告内容は民間助成研究成果データベースに収録のため国立情報研究所に提供されている。

##### (1) 第12回研究報告

- 1) 癌遺伝子産物によるPI3K/AKT経路の活性化メカニズムの研究  
赤城 剛（大阪バイオサイエンス研究所） ..... 33
- 2) シロイヌナズナのtRNAスプライシング・エンドヌクレアーゼの機能解析  
赤間 一仁（島根大学生物資源科学部） ..... 33
- 3) 遺伝子組み込み型ヒト培養複合口腔粘膜の開発  
泉 健次（新潟大学大学院医歯学総合研究科） ..... 34
- 4) 新しい性ホルモン標的遺伝子の同定、生体機能解析とその創薬への応用  
井上 聡（東京大学大学院医学系研究科加齢医学） ..... 35
- 5) 胎盤関門における内分泌攪乱化学物質（環境ホルモン）の透過機構解明  
宇都口直樹（昭和薬科大学薬剤学研究室） ..... 36
- 6) 損傷DNA前駆体を分解する蛋白質による突然変異抑制に関する研究  
紙谷 浩之（北海道大学大学院薬学研究科） ..... 37
- 7) 小型魚類ミュータントを用いた形づくりのシグナル伝達の研究  
川上 厚志（東京大学大学院理学系研究科生物科学科） ..... 38
- 8) 高等植物のLKP1、LKP2による開花時期と日周リズムの制御  
清末 知宏（香川大学遺伝子実験施設） ..... 39
- 9) 遺伝的に異なる那須-Hakola病の免疫細胞の機能の解析  
近藤 誉之（国立精神神経センター神経研究所免疫研究部） ..... 40
- 10) イオンチャンネル病の細胞学的成因の解明と特異的抗不整脈薬治療の可能性  
清水 渉（国立循環器病センター内科心臓部門） ..... 41
- 11) ATP受容体の活性化による網膜神経上皮細胞の増殖制御機構  
－受容体間の機能的連関－  
杉岡 美保（奈良県立医科大学生理学第一講座） ..... 42

12) 昆虫の先天性免疫遺伝子発現を誘導する異物認識蛋白質の単離 谷合幹代子（農業生物資源研究所昆虫細胞工学研究チーム）	43
13) 小腸移植を支えるためのドラッグデリバリーシステムを 利用した虚血再灌流障害の克服 富田 幹雄（東京薬科大学薬学部薬物動態制御学教室）	44
14) クロマチン構造変換に関与するアクチン関連タンパク質の機能解明 原田 昌彦（東北大学大学院農学研究科）	45
15) 高効率ペプチド免疫法の確立 古川 功治（東京理科大学 現産業技術総合研究所）	46
16) 変異マウスを用いた運動神経軸索ガイダンスの研究 榎 和子（筑波大学基礎医学系）	47
17) 体腔内における内臓器官の三次元的配置を決定する遺伝的機構に関する研究 松野 健治（東京理科大学基礎工学部生物工学科）	48
18) 免疫抑制剤FK506の新規作用点の解明 松田 達志（慶應義塾大学医学部微生物学免疫学教室）	49
19) NK細胞レセプターによるMHCクラスIリガンド認識機構の解明 松本 直樹（東京大学大学院新領域創成科学研究所先端生命科学専攻）	50
20) 寿命とストレスを制御する遺伝子 森口 徹生（東京大学分子細胞生物学研究所分子情報研究分野）	51
21) 生物のもつ構造色の発色機構解明とその再現実験 吉岡 伸也（大阪大学生命機能研究科）	51
22) ホヤ、ナメクジウオに探る神経冠の起源と進化 和田 洋（京都大学フィールド科学教育研究センター）	53

## (2) 第13回研究報告

- 1) 好酸球による自己異常分子認識機構  
足立貴世美（高知大学医学部） ..... 56
- 2) タバコモザイクウイルスの複製複合体形成に関与する宿主因子の解明  
石川 雅之（北海道大学大学院農学研究科） ..... 56
- 3) ナメクジをモデル動物として用いた末梢および中枢での嗅覚情報処理機構の解明  
伊藤 悦朗（北海道大学大学院理学研究科生物科学） ..... 58
- 4) アミノ酸及び遺伝子発現調節領域における変異の適応度(生存競争)への効果について  
猪股 伸幸（九州大学大学院理学研究院） ..... 59
- 5) 細胞外低分子シグナルを介した放線菌の種間クロストーク  
上田 賢志（日本大学生物資源科学部） ..... 60
- 6) マメ科植物就眠運動の生理活性物質によるコントロールに関する基礎的研究  
上田 実（慶應義塾大学理工学部） ..... 60
- 7) 新規骨吸収阻害薬の開発を目指した破骨細胞分化因子の信号伝達経路の解析  
宇田川信之（松本歯科大学） ..... 61
- 8) 胎児脳への直接的遺伝子導入によるPax6 遺伝子機能の解析  
大隈 典子（東北大学大学院医学系研究科） ..... 62
- 9) Death receptor によるシグナル伝達の制御機構の解明  
片岡 孝雄（東京工業大学バイオ研究基盤  
支援総合センター生命情報分野） ..... 63
- 10) 小脳運動学習メカニズムの多重性と海馬による制御  
川原 茂敬（東京大学大学院薬学系研究科） ..... 65
- 11) AML1複合体因子の機能解析  
北林 一生（国立がんセンター研究所分子腫瘍学部） ..... 66
- 12) Rhodococcus属放射線菌遺伝子プロモーターのStreptomyces属放線菌での応答解析  
小林 達彦（筑波大学応用生物化学系） ..... 67
- 13) 加齢に伴う学習記憶障害に関与する遺伝子プログラムの同定  
齊藤 実（東京都神経科学総合研究所） ..... 68
- 14) グリーンケミストリーを指向したブレビオン類の合成化学的研究  
滝川 浩郷（神戸大学大学院自然科学研究科） ..... 69
- 15) 小胞体Ca<sup>2+</sup>放出に関する研究  
竹島 浩（東北大学大学院医学系研究科） ..... 70

16) 遺伝子改変マウスF9細胞株を用いた核内受容体の機能解析 千葉 英樹 (札幌医科大学医学部病理学第二講座) .....	71
17) mRNA動態の新概念～神経軸索を輸送されるmRNAの存在と神経回路形成への関与 東田 千尋 (富山医科薬科大学和漢薬研究所薬効解析センター) .....	72
18) アブシジン酸生合成阻害剤の創製 轟 泰司 (静岡大学農学部) .....	73
19) 生体内における肥満細胞応答におけるTGF- $\beta$ シグナルの役割についての検討 中尾 篤人 (順天堂大学医学部アトピー疾患研究センター) .....	74
20) 菌様原生生物ラビリントゥラに感染するウイルスの 感染メカニズムと生態での役割の解明 本多 大輔 (甲南大学理工学部生物学科) .....	74
21) 妊娠子宮におけるアドレノメデュリンの発現調節機構と子宮収縮抑制機序の解明 柳田 俊彦 (宮崎大学医学部薬理学講座) .....	75
22) Dok 類縁マルチアダプターによる生体高次機能の制御機構 山梨 裕司 (東京医科歯科大学難治疾患研究所細胞制御学分野) .....	76
23) ジーンターゲットングによるWolfram症候群遺伝子(WFS1)の機能解析 湯尻 俊昭 (山口大学医学部附属病院第3内科) .....	77

## 2. 国際交流助成

国内で実施された研究の成果を、平成15年4月から16年3月の間に海外で開催された学会等で発表するに際し、当財団の助成（第15回国際交流助成）を受けた研究者からの学会等参加報告を以下に記載した。

### 学会発表報告

- 1) ゴードンカンファレンス－CAGレポート病  
名古屋大学大学院医学系研究科 足立 弘明 ..... 81
- 2) 第17回蛋白質学会シンポジウム  
東京大学大学院理学系研究科物理学専攻 伊野部智由 ..... 82
- 3) 第94回アメリカ癌学会総会  
東京大学大学院腫瘍外科 大梶 祐頼 ..... 83
- 4) 第8回アミノ酸とタンパク質に関する国際会議  
東京薬科大学生命科学研究科細胞機能学研究室 大沼 みお ..... 85
- 5) 第19回国際遺伝学会  
東京大学新領域創成科学研究科先端生命科学専攻 長内美瑞子 ..... 86
- 6) 第1回FEMS (Federation of European Microbiological Societies) 国際会議  
東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻 加藤創一郎 ..... 87
- 7) Cold Spring Harbor Laboratory meetings 『Eukaryotic DNA replication』  
京都工芸繊維大学大学院ベンチャーラボラトリー 神崎 秀嗣 ..... 88
- 8) 第7回植物分子生物学国際学会  
東京大学大学院総合文化研究科生命環境科学系渡邊研究室 岸 光子 ..... 90
- 9) FASEBサマリーサーチカンファレンス：繊毛虫分子生物学  
金沢大学大学院自然科学研究科 小林 孝 ..... 92
- 10) 第6回アメリカ遺伝子治療学会 (American Society of Gene Therapy)  
国立医薬品食品衛生研究所遺伝子細胞医薬部第一室 櫻井 文教 ..... 93
- 11) 第2回ヒトプロテオーム学会及び第19回国際生化学分子生物学会議・合同会議  
九州大学大学院医学研究院 佐藤 陽子 ..... 95
- 12) 第10回国際深海生物学会  
東京大学海洋研究所海洋生態系動態部門 末次貴志子 ..... 96
- 13) DNAコンピュータに関する第9回国際学会  
北海道大学大学院工学研究科システム情報工学専攻 田中 文昭 ..... 97

14) 国際動物音声コミュニケーション学会第1回大会 千葉大学自然科学研究科博士課程後期 時本楠緒子……………	98
15) アメリカ植物学会 (American society of plant biology) 東京大学大学院理学系研究科 西田 敬二……………	100
16) ヨーロッパ原生生物学会・ヨーロッパ織毛虫学会 金沢大学大学院自然科学研究科 能登 朋子……………	101
17) 6 <sup>th</sup> European Meiosis Meeting EMBO workshop on meiosis 東京理科大学理工学研究科応用生物科学専攻博士課程3年 濱田 文香……………	102
18) モス2003: セン類研究の国際年会 基礎生物学研究所種分化機構第二研究部門 日渡 祐二……………	103
19) 2003年アメリカ泌尿器科学会総会 琉球大学医学部泌尿器科研究生 宮里 実……………	105
20) 植物の配偶体: 進化、発生、機能 横浜国立大学エコテクノロジーシステムラボラトリー 諸橋 賢吾……………	106
21) 第1回動物音声コミュニケーション学会 千葉大学自然科学研究科博士課程2年 山田 裕子……………	107
22) 第94回米国癌学会年次総会 東京医科歯科大学難治疾患研究所分子遺伝部門 吉田 清嗣……………	108
23) タンパク質 - 標的、手段、治療 - 富山県立大学工学部生物学研究センター 米田 英伸……………	110
24) 第33回北米神経科学学会 理化学研究所脳科学総合研究センター ナイル マーフィー……………	111
25) 第13回放線菌の生物学に関する国際会議 東京大学大学院農学生命科学研究科助教授 大西 康夫……………	112
26) 第43回アメリカ細胞生物学会(ASCB) 松本歯科大学口腔生化学 奥村 茂樹……………	113
27) 第36回アメリカ腎臓学会 (American Society of Nephrology) 東京大学医学部附属病院腎臓内分泌内科 邵 菁……………	114
28) アメリカ頸椎外科学会 University of Cambridge Centre for Brain Repair 瀬戸口啓夫……………	115
29) 北米神経科学学会第33回年次大会 大阪大学大学院医学系研究科神経内科学 長野 清……………	116
30) 第45回米国血液学会総会 山口大学大学院生体シグナル解析医学講座 縄田 涼平……………	118

- 31) 第43回インターサイエンス会議に出席して  
北里大学大学院感染制御科学府修士課程2年 長谷川恵子…………… 119
- 32) 第2回国際薬理ゲノム学会・第11回環太平洋臨床薬理遺伝子学会合同年会  
北海道大学大学院薬学研究科 藤枝 松輝…………… 120



## IV. 財団の運営と組織

### 1. 設立趣意

21世紀に向けて、現代社会が有限な天然資源をもとに繁栄を持続するためには、生命科学・技術の継続的進歩と、それを活用する関連産業の発展が重要であることは言うまでもありません。

近年における生命科学はゲノムやプロテオーム科学などの先端技術や、それを駆使した細胞レベルの研究分野で日々激しい競争が展開されており、その進歩は目覚ましいものがあります。近い将来、わが国の研究がこれらの新しい分野で飛躍的な進歩を達成しうるならば、それは国内の社会経済の発展にも大きく貢献できるものと信じます。そのために、科学技術基本計画に基づき、総合的見地から国を挙げての各種生命科学の研究振興と人材育成が課題であり、その過程で生まれた創造的発明の早急な実用化が望まれます。また一方で、真に価値ある先駆的研究は、個性的で創造性豊かな研究者により、また既存の制約を超えた研究環境下で、粘り強い努力から生み出されるものと期待されます。

このような認識から、本財団は生命科学の分野で有能な研究者を全国に発掘し、その創造的研究に対して資金的支援を継続することは極めて有意義であるとし、財団設立以来微力ながらも研究の資金助成および国際交流、研究集会などの助成を鋭意続けてまいりました。さらには公開シンポジウムによる生命科学の啓蒙も重要な活動となっております。これらはわが国の生命科学研究が一日も早く世界的最高水準に達することを念願してのことです。

協和発酵工業株式会社は、バイオテクノロジーと有機合成化学などの技術を基盤に広く産業活動を展開しております。同社の創設者である加藤辨三郎は企業活動の発展をめざすと共に科学技術の振興によって社会の発展と人類の福祉への貢献を同社の経営理念としておりました。加藤翁は昭和58（1983）年8月に永眠いたしました。40年余におよぶ会社経営の他に、わが国の多くの科学技術委員会などに関与した体験を通して生命科学振興の一層の必要性を強調いたしておりました。

こうした加藤翁の遺志を生かし、また総合的で領域横断的観点から生命科学研究振興の重要性を認識した協和発酵工業株式会社は、同社の創立40周年の記念事業として、昭和63（1988）年12月、財団法人加藤記念バイオサイエンス研究振興財団を設立いたしました。

### 2. 目的（寄附行為第3条）

この法人は、バイオサイエンスの分野における研究者に対する助成ならびにシンポジウム・

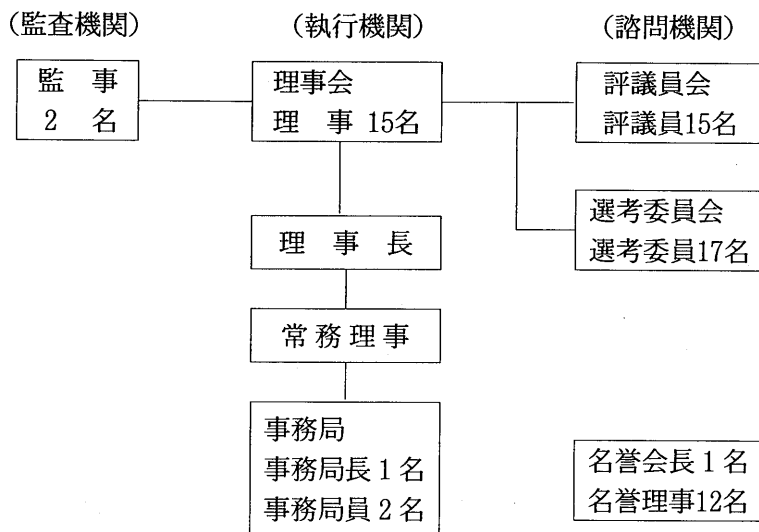
研究会の開催・助成を行なうことにより、科学技術の振興をはかり、もって社会経済の発展に寄与することを目的とする。

### 3. 事業（寄附行為第4条）

この法人は、前条の目的を達成するために、次の事業を行なう。

- (1) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者に対する助成
- (2) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野における研究者の国際交流の助成
- (3) バイオサイエンスおよびこれに関連する分野におけるシンポジウム・研究会の開催および助成
- (4) その他目的を達成するために必要な事業

### 4. 組織



（平成16年4月1日現在）

### 5. 財団の概要

名称 ..... 財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団  
 Kato Memorial Bioscience Foundation  
 設立許可日 ..... 1988年12月23日  
 主務官庁 ..... 文部科学省  
 特定公益増進法人許可 ..... 2003年12月3日更新

基本財産 …………… 7億6百万円  
出 捐 者 …………… 協和発酵工業株式会社

## 事業内容

### 1. 研究助成

**助成対象** バイオサイエンス分野において、創造的且つ先駆的研究をめざす40歳までの研究者。

国内の大学および国公立研究所に属し、国内で研究する研究者。

但し、本助成金受領後3年間を経ない研究者および当財団の選考委員と同一研究室に所属する研究者は対象外とする。

**応募方法** 財団指定の研究機関へ推薦依頼。財団所定の申込書に記入の上、推薦書を添えて当財団へ申し込む。

### 2. 国際交流助成

**助成対象** 海外で開催されるバイオサイエンス関連の研究集会で発表する35歳（医歯学系卒業者は37歳）までの研究者。

**応募方法** 公募：当財団所定の申込書に記入の上、当財団へ申し込む。

（注）上記1および2は当財団選考委員により審査される。

### 3. 学会等開催助成

**助成対象** バイオサイエンス関連の学会、研究会の開催。

**応募方法** 非公募：当財団理事または評議員の推薦による。

### 4. 公開シンポジウムの開催

バイオサイエンス分野の話題性あるテーマについて、当財団主催で年一回開催する。

### 5. その他、財団の目的を達成するために必要な事業

## 6. 平成16年度財団役員等

(理事長)	平田 正	協和発酵工業(株) 会長
(常務理事)	小室敏雄	協和発酵工業(株) 顧問
(理事)	伊藤正男	東京大学名誉教授 理化学研究所脳科学総合研究センター特別顧問
	大塚栄子	北海道大学名誉教授 北海道大学監事
	大村 智	(社)北里研究所理事・所長
	岡田吉美	東京大学名誉教授
	小関治男	京都大学名誉教授
	小田鈎一郎	東京理科大学基礎工学部嘱託教授
	香川靖雄	自治医科大学名誉教授 女子栄養大学副学長
	岸本忠三	総合科学技術会議議員 大阪大学生命機能研究科客員教授
	菅野晴夫	(財)癌研究会名誉研究所長 同癌化学療法センター所長
	高久史麿	東京大学名誉教授 自治医科大学学長
	西塚泰美	神戸大学名誉教授 神戸バイオシグナル研究センター名誉所長
	別府輝彦	東京大学名誉教授 日本大学生物資源科学部教授
	森 謙治	東京大学名誉教授
(監事)	伊藤 醇	中央青山監査法人代表社員 公認会計士
	樋口節夫	中央青山監査法人代表社員 公認会計士
(評議員)	小川秀興	順天堂大学学長
	折茂 肇	健康科学大学学長
	垣添忠生	国立がんセンター総長
	勝木元也	自然科学研究機構理事・基礎生物学研究所所長
	北原 武	東京大学名誉教授 (社)北里研究所基礎研究所部長 帝京平成大学薬学部教授
	木村 光	京都大学名誉教授 (株)グリーンバイオ代表取締役
	郷 通子	長浜バイオ大学バイオサイエンス学部教授
	榊 佳之	理化学研究所ゲノム科学総合研究センターセンター長
	谷口維紹	東京大学大学院医学系研究科教授
	鶴尾 隆	東京大学分子細胞生物学研究所教授
	永井良三	東京大学大学院医学系研究科教授
	長田重一	大阪大学大学院生命機能研究科教授

	西川 伸一	理化学研究所発生・再生科学総合研究センター副センター長
	三品 昌美	東京大学大学院医学系研究科教授
	柳田 敏雄	大阪大学大学院生命機能研究科教授
(選考委員長)	飯野 正光	東京大学大学院医学系研究科教授
(副選考委員長)	長澤 寛道	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
(選考委員)	秋山 徹	東京大学分子細胞生物学研究所教授
	審良 静男	大阪大学微生物病研究所教授
	新井 洋由	東京大学大学院薬学系研究科教授
	江崎 信芳	京都大学化学研究所教授
	岡野 栄之	慶應義塾大学医学部教授
	春日 雅人	神戸大学大学院医学系研究科教授
	門脇 孝	東京大学大学院医学系研究科教授
	北本勝ひこ	東京大学大学院農学生命科学研究科教授
	木下一彦	自然科学研究機構統合バイオサイエンスセンター教授
	住本 英樹	九州大学生体防御医学研究所教授
	関水 和久	東京大学大学院薬学系研究科教授
	西田 栄介	京都大学大学院生命科学研究科教授
	藤吉 好則	京都大学大学院理学研究科教授
	山田 信博	筑波大学臨床医学系教授
	吉田 稔	理化学研究所主任研究員

(平成16年4月1日現在)

(名誉会長)	木下 祝郎	協和発酵工業(株)特別顧問
(名誉理事)	池原 森男	大阪大学名誉教授 (株)生物分子工学研究所嘱託
	井上 一郎	東京工業大学名誉教授
	大澤 利昭	東京大学名誉教授 東京薬科大学学長
	清水喜八郎	(社)北里研究所顧問 (財)日本抗生物質学術協議会理事長
	白砂 信善	公認会計士
	早石 修	京都大学名誉教授 (財)大阪バイオサイエンス研究所理事長
	藤巻 正生	東京大学名誉教授 御茶の水大学名誉教授 (財)食生活研究会理事長
	中嶋 暉躬	東京大学名誉教授 星薬科大学学長
	中村寛之助	協和発酵工業(株)相談役

松井正直 東京大学名誉教授  
水野傳一 東京大学名誉教授  
山田秀明 京都大学名誉教授 富山県立大学名誉教授

## 事務局

(事務局長) 小室敏雄  
(事務局次長) 持田顕一  
(事務局主査) 松浦智佳子

## 編集後記（財団年報2003）

今年の夏は、参議院選挙が終わるのを待っていたかのように梅雨明けとなりましたが、局地豪雨による水の被害に加え40度を超える記録的な酷暑の夏となりました。うだるような暑さの中で財団年報第5号の校正です。第5号では従来の編集を若干手直し致しました。公開シンポジウムの講演要旨の再録を割愛し、助成研究報告の掲載を1年繰り上げ、そのため本号は2年度分の研究報告を掲載致しました。

さて本財団も、理事長の「はじめに」の言葉にありますように、15年の時を刻むことが出来ました。助成総額もいつのまにか7億円を越えました。これも偏に財団活動にご尽力いただいている理事を始め財団関係者の方々と運用財産を拠出いただいている協和発酵のご支援の賜物でありあらためて感謝申し上げる次第です。

財団の事業活動には大きな変化はありませんが、昨年度に続き嬉しい知らせが幾つかあります。春には評議員の北原武先生が農学賞を受賞されました。秋の褒賞では評議員の榊佳之先生が紫綬褒章を受章され、理事の菅野晴夫先生が文化功労者に選出されました。ともにお喜びしたいと存じます。

公益法人の制度改革については、昨年6月「公益法人制度の抜本的改革に関する基本方針」（閣議決定）が出され、引き続き制度改革に関する有識者会議で議論が進行中です。助成財団側では、『公益法人制度問題連絡会』により意見集約を図る等の対応をしておりますが、公益法人制度の議論の方向には注意が必要なようです。

いずれにしても今年度も元気に財団の理念にふさわしい活動を続ける所存ですので、関係各位皆さまのご指導ご鞭撻を宜しくお願い申し上げます。 (小室 敏雄記)

(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団  
財団年報第 5 号 (平成15(2003)年度)

Annual Report of Kato Memorial Bioscience Foundation  
Vol. 5(2003)

発行日 2004年 8月 1日  
発行者 理事長 平田 正  
編集者 常務理事・事務局長 小室敏雄  
事務局長次長 持田顕一  
発行所 財団法人 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団  
〒194-8533 東京都町田市旭町 3-6-6  
電話 042-725-2576 ファックス 042-725-2576  
印刷 真友工芸株式会社  
〒108-0014 東京都港区芝 4-18-9 長尾ビル

